



2016
No.8

線

Line

目次

- 巻頭インタビュー
書写と書道の連携を考えて……2
池田利広
- 書写のココが知りたい!
鉛筆の持ち方の指導は、どうすればよいですか?……4
宮本榮信
- 子どもたちに伝えたい
補助器具で正しい持ち方の「コツ」を……6
鉛筆と消しゴムの豆知識……8
- 全ての学びにつながる鉛筆の持ち方を「クジャク法」で……9
橋爪秀博
- 指導のミカタ
* 書写における課題解決学習……10
* 文字の大きさと配列を考えて書こう……12
- これからの国語を考える
アクティブ・ラーニングと書写指導(連載第二回)……14
尾崎靖二
- コンドウアキの書写的生活
連載第八回

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版



コンドウアキ

キャラクターデザイナー・イラストレーター・作家。「リラックマ生活」シリーズのほか、「つぎぎのモフィ」、「みかんぼつや」シリーズなど著作多数。文具メーカー勤務を経てフリーとして活躍する傍ら、二児の母として育児に奮闘中。

コンドウアキの

書写的な生活

連載 第八回

運動にはフォームがあります。それが適切でなければ、十分な効果を得られないだけでなく、様々な障害につながります。鉛筆を正しく持っていないと、文字を書くことはできません。ですが、ほんのちょっとした心がけで、正しい持ち方は身につけられるのです。気付いたその時に、見直してみませんか?

教科書訂正のお詫び (五年, 六年) ©平成27年4月に供給いたしました教科書に訂正がございます。弊社Webサイト「小学書写」資料ダウンロードページ (http://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/s-shosha/s-shosha_dl/) をご確認ください。ご指導の際には十分ご注意くださいようお願い申し上げます。



日文教育資料[小学校書写]
平成28年(2016年)1月8日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

本書の無断転載・複製を禁じます。
CD33296

題字・新谷泰鵬

日本文教出版 株式会社
<http://www.nichibun-g.co.jp/>

- 大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171
- 東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618
- 九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938
- 東海支社 〒461-0004 名古屋市中区東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261
- 北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690

——書写・書道の世界を志すことになったきっかけを教えてください。

子どものころに見た教科書のお手本から感じる「筆の勢い」や「文字の力強さ」に憧れ、自分もそういう文字を書いてみたいと思ったことですね。お手本通りに書きたいのに、なかなか書けなかったことを思い出します。その後、教科書のお手本だけでなく、古典や書作品などを見ているうちに「あんなふうに書きたい、こんなふうに書きたい」と思うようになり、誰かが見て感動してくれる作品として表現できるようにしたいと考えるようになりました。

——文字には、書く楽しさや見る面白さがありますね。

私は今、大学で指導をしています。学生たちが書の作品作りに日々励んでいるのを見ると、何に興味を持ち、それをどのように表現しようとしているのかがわかります。人にはそれぞれ好みがありますね。音楽や美術は、比較的それがわかりやすい形で表れますが、書はどうでしょうか。

小・中学校で学ぶ書写では「文字を正しく整えて（速く）書く」ことを目標としています。国語科書写なので仕方ない部分はあるにしても、文字を正確に書くだけでは、子どもたちの嗜好性を育てるのは難しいように思います。書写と書道の連携という意味において、日常生活のなかで、小さいときから文字に目を向ける機会を増やしていくことが大切だと感じています。

——文字に興味を持たせるには、どうしたらいいでしょうか。

子どもが文字に興味を持つようには、たとえば書写の指導の際に、先生が子どもの前で書いて見せるのが一番だと思います。百聞は一見に如かずですよ。

職人が何かを作っているところを目の前で見たり、音楽の生演奏を会場で聴いたりすることが、映像や音声で見聴きすると圧倒的に違うと感じるのは、五感を働かせて感じる臨場感や、そこでの味わえない刺激があるからだと思います。このあたりの課題については、次の新しい学習指導要領で示された内容

先生が子どもの前で書いて見せるのが一番。そこでしか味わえない刺激があります。



池田利広（隼仁）

大阪教育大学教授。筑波大学芸術専門学群書写専攻卒業、筑波大学修士課程芸術研究科美術専攻書修了（芸術学修士）。日本文教出版「小書写」教科書編集委員。

るからでしょうね。多感な時期を過ごす子どもだからこそ、いろいろな体験が必要ではないでしょうか。

——昨今の書写の教科書について、どんなことを感じますか。

小学校から大学での書写・書道の授業を振り返ると、小筆を使った授業がほとんどなかったなと感じます。硬毛の関連をいうなら、より硬筆に近い小筆での学習がもつとあってもよいのではないのでしょうか。たとえば手紙やがきのように、実用的な書式を小筆で書く機会というものが、もう少し扱われてもいいように思うのです。

最近「毛筆学習を低学年から取り入れてはどうか」といった話を耳にします。早い段階から毛筆に慣れるということは、私自身の経験からも、とても大切なことだと思います。ただし、学校現場では、鉛筆の持ち方指導に苦慮しているとも聞いていますので、その状況において毛筆の扱いをどのように指導するのかわからない課題があります。適切でない持ち方が身についてしまうと、後々大変ですから。

どういったことを目的として「毛筆を低学年から」と考えるかによりますが、たとえば払いやはねといった筆使いを体感させることが目的だとするならば、大筆を使わなくても、小筆や筆ペン、水書き筆でもいいでしょうね。

——毛筆教材は、いろいろな可能性を秘めているということですね。

単に小筆の教材を増やすということではなく、大筆と小筆を適切に使い分けるといえることです。文字を書くということに限定すると、文字が大きくなればなるほど字形や筆使いを整えるのが難しくなります。大きな文字を書く、そのことを体感する喜びというのは、書写ならではの楽しみです。書き初めのような機会には、大きく元氣よく書くことに意味があるでしょう。しかし、払いやはねの筆使いを確かめるために、そこまで大きく書かなければ確認できないのかなと、ふと思うことがあります。

を見てから、改めて考えてみたいと思っています。

——書写の授業は、デジタル教科書の開発・導入によってずいぶん変化するように思います。

少し前までは、授業のなかに端末を持ち込み、それを子どもたちに操作させるということが新鮮でしたね。書写に限らず、実際にそれをどう活用するかということになると、いろいろと課題があります。

便利だからといって安易に頼るのではなく、様々な教育機器や資料を、どの場面・何のために利用するかを明らかにしなくてはなりません。子どもたちにどんな力を付けさせたいのか、そのことが大切です。

——デジタル教科書といえば「筆使いの動画」というイメージがありますが…

書写指導を苦手とする先生が、自分の代わりとして筆使いの動画を再生して、子どもたちに見せるというのはいんですけれど、苦手な先生は、すぐに動画を利用するのではなくて、まず自分で書いてみるという行為が大切ではないでしょうか。その過程で、補助的に利用するのはいいと思いますが、要はどう扱うかが重要だということです。

その一方で、子どもの前で実際に書いて見せられる先生が、あえて動画を利用するメリットが見つかると思ったりしています。

——最後に、現場の先生たちにメッセージをお願いします。

書写であれ図工であれ、知識として持つておかないといけない部分があります。それぞれに教科の専門分野はあったとしても、小学校は担任制ですから、多様な内容に対応できる能力を身につけることが大切だということはいまでもありません。

たとえば、これからは道徳も一つの教科として扱われますし、道徳的価値と書写がうまく連携できればいいなと感じます。「助け合う心」とか、そういう言葉や丁寧な、心を込めて書くことによって理解が深まることであると思います。国語と他教科の関連という意味で、書くという活動の幅を広げてほしいと願っています。

鉛筆の持ち方の指導は、どうすればよいですか？

1 書く子どもたちの様子を見て

ときどき、研究会で小学校の授業を見ることがあります。そのとき、いつも気になることがあります。それは、子どもたちが書いているときの「姿勢」や「鉛筆の持ち方」です。私の見る限り、正しい姿勢や鉛筆の持ち方で書いている子どもたちは、クラスの二割程度でしょうか。

ほんの一例に過ぎませんが、子どもたちは、次のような鉛筆の持ち方をしています。



ひとさし指の先端を、親指が上から押さえている。



親指がひとさし指の中ほどに重なっている。



ひとさし指の第2関節が極端に折れている。



親指の先端をひとさし指がおさえている。

書かれた文字の字形がある程度整っていれば、それほど大きな問題ではないと思われるのでしょうか。鉛筆の持ち方が正しくなくても、文字を書くことはできます。しかし、そのことで、書いている途中で指が痛くなったり、文字の点画や字形が乱れたり、書く姿勢が崩れやすくなったりしてしまうことが理解されていないように思います。はじめに誤った持ち方が身についてしまうと、後から直すのは至難の業です。

2 書く姿勢や筆記具の持ち方は

学習指導要領の国語編の「書写に関する事項」には、

- * 文字を書く基礎となる姿勢
- * 筆記具の持ち方
- * 筆順
- * 点画の書き方
- * 一文字の書き方
- * 文字の集まりの書き方
- * 目的に応じた書き方

の指導が示されています。つまり、書く姿勢や鉛筆の持ち方の指導は、書写学習の基礎・基本として位置づけられています。

鉛筆の持ち方の指導について、確かめてみましょう。

3 鉛筆を正しく持つには、指の働きに注目

鉛筆を持つとき、それぞれの指は大切な働きをします。鉛筆に触れるのは、親指・ひとさし指・中指です。親指とひとさし指で鉛筆をつまみ、中指を添え、鉛筆を支えて固定します。そのとき、鉛筆の先端が見えるように持ちます。また、鉛筆の軸がひとさし指のどの位置に接しているかが大切です。それは、紙面と鉛筆の角度に関わるからです。薬指と小指は軽く握り、親指・ひとさし指・中指を支えます。

左図のように、五本の指のそれぞれが大切な働きをしています。したがって、鉛筆の持ち方が適切でないと、それぞれの指の働きが不自然になります。そして、指が疲れたり、書く文字の点画や字形が乱れたりすることになります。

軸は、ひとさし指の第2関節と第3関節の間にくるようにする。

- 親指は、第1関節を少し曲げ、ひとさし指に触れないように鉛筆を持つ（横画を引く際に力を入れる）。
- ひとさし指は、鉛筆を削った部分のすぐ上を持ち、鉛筆の一面に沿わせて角張らないようにする（縦画を引く際に力を入れる）。
- 中指は、鉛筆を支えて固定し、ひとさし指より前に出す（点画の始筆・送筆・終筆の部分を円滑に書けるように、親指・ひとさし指を支える）。
- 薬指・小指は、軽く曲げ、中指に沿わせて下から支える。

4 鉛筆を正しく持つメリットは

① 文字を書くときの姿勢が良くなります。鉛筆を正しく持っていないと、鉛筆の先端が見えないので、覗き込むようになり、自然に左肘を机につけて書くため、上半身が傾きます。鉛筆の持ち方と姿勢は密接な関係にあります。



[良い姿勢]



[悪い姿勢]

② それぞれの指の働きを効果的に発揮することができます。互いの指と指を圧迫することなく、指を痛めたり疲れさせたりしません。



みやもとしげのぶ
宮本榮信（墨童）

元千早赤阪村立千早小学校校長。「墨童書道会」主宰。大阪府教育委員会指導
主事、大阪府内の公立幼・小・中の校長、大阪府市小・中学校書写教育研
究会会長などを歴任。日本文教出版「小学書写」教科書編集委員。

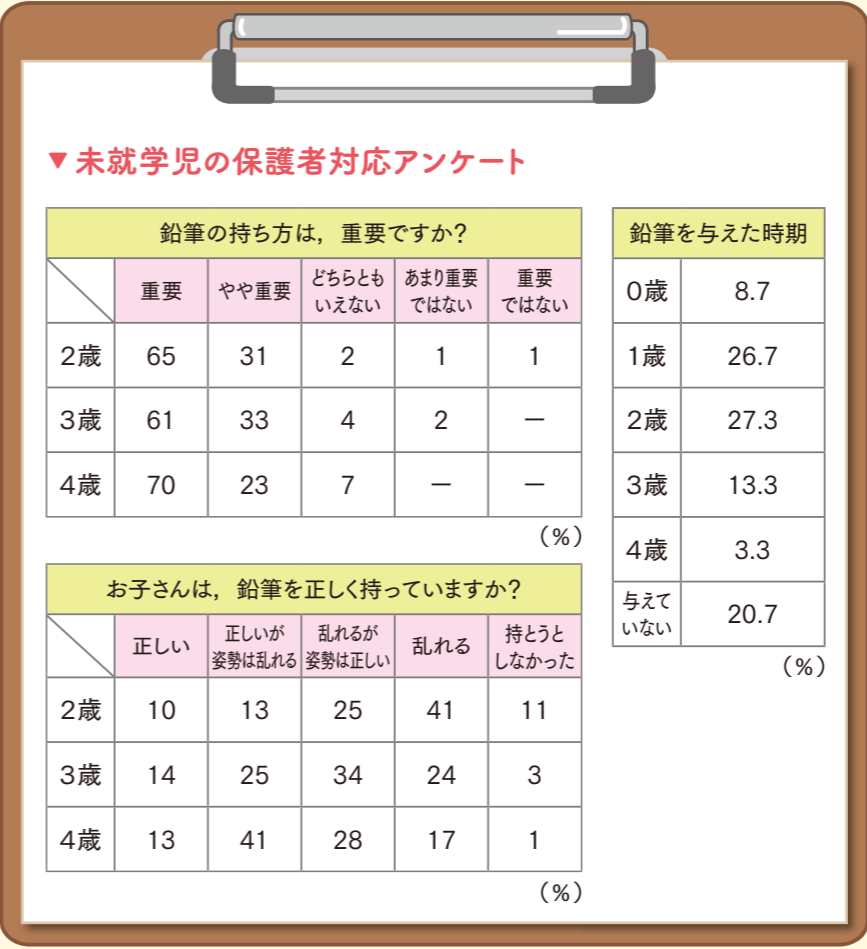
5 鉛筆を正しく持つための指導は

入学前に「鉛筆の持ち方」を教えてもらっていない子どもは、自分好みの持ち方が身についてしまっています。物を書き始める二・三才ぐらいのときに持ち方を矯正してやると、直しやすいと思います。矯正は小学校入学後でも十分に可能です。いったん身についた習慣は、なかなか直りにくいものです。正しく持たせるための手段として、補助器具も市販されていますので、それを活用するのも一つの方法でしょう。

しかし、何といっても学校で根気よく指導し続けることです。「書写」の時間だけでなく「書く」活動のときは、繰り返し何度も注意を促すことです。特に、個人指導が大切です。一人一人の子どもに絶えず目を配りながら、励ましや自覚を促す働きかけが必要です。

同時に、保護者の方の協力も大切です。家庭でも鉛筆の持ち方に対する気配りをお願いしたいものです。「文字を正しく整えて書く」ために、鉛筆の持ち方の指導を惜しまないようにしましょう。

正しく整った文字を書いているのに、鉛筆の持ち方や書く姿勢が...ということよくあります。子どもたちが初めて鉛筆を持つのは、何歳なのでしょう。文房具メーカーのトンボ鉛筆によると、小学校に入学してくる子どもたちの多くは、既に鉛筆を持った経験があるようです。子どもを持つ多くの保護者が「鉛筆の持ち方は重要」だと考えているにも関わらず、正しく持っていない子どもは「少数」であるという実態が見えてきます。



もちかたくんを使ってみよう！



1 まず、鉛筆を持つ親指の爪の中心に、線を書きます。



2 もちかたくんを差し込んだ鉛筆を、親指とひとさし指で持ちます。このとき、もちかたくんの線と親指の爪の線が一直線になるようにします。



3 中指を添え、3本の指で正しく持てているか確かめます。



4 鉛筆をひとさし指に付けるようにして立てます。これだけで、余計な力が入ることなく、自然に鉛筆を持つことができます。

指にフィットするため、書いているときも持ち方が崩れにくく、楽に持つことができます。入門タイプと組み合わせると、さらに持ち方が安定します。鉛筆の持ち方は初めが肝心です。補助器具を使って指を置く位置などを確かめたり、保護者や先生がそっと手を添えてあげたりすることは、とても大切です。子どもと一緒に練習し、コミュニケーションを深めてみてください。

「はね」や「はらい」を正しく、整った文字を書くためには、正しい持ち方を身につけることが何より大切です。子どもが成長すればするほど、正すのが難しくなる鉛筆の持ち方。今回は、鉛筆を正しく持つ練習ができる補助器具について調べてみました。

もちかたくん
正しい指の位置を覚えるための練習具です。右手用と左手用があります。

入門タイプ
持ち方をしっかりサポートする「入門タイプ」です。

ユビックス
筆記具を正しい角度で持つための練習具です。鉛筆以外にも様々な筆記具に対応しています。右手と左手のどちらでも使用できます。

突撃取材

身につけた正しい持ち方は、一生の宝物です！

▼補助器具を作った経緯を教えてください。
三十年ほど前の話ですが、児童かきかた研究所の高嶋諭先生が、鉛筆の正しい持ち方を熱心に教えておられました。その高嶋先生が「補助器具を一緒に作りませんか」と呼びかけてくれたのがきっかけです。ですので、メーカーが作ったものではなく、教育現場からの声によって形になったものなんです。

▼現在の形になるまで、試行錯誤があったのでしょうか。
今は柔らかい樹脂でできていますが、高嶋先生は木を彫るなど、いろいろな素材で試しながら、一点生産しては子どもたちに渡しておられたと聞いています。私たちは金型を用いた生産のノウハウを持っていますから、大量生産できるようにしました。

▼「もちかたくん」のコンセプトは？
補助器具というのは、どうしても依存症になりがちです。「もちかたくん」という補助器具を付けていなければ持ち方が正しくならないということではいけません。器具を外したときに持ち方が変わらず、そして自然に正しい持ち方が身につくようにしたいと考えました。鉛筆に加工を施すのではなく、子どもの成長の一定の期間だけこの器具を用いるようにしようということで、このような形になりました。使い方も、当時から変わっていません。

▼左利き用があるところもポイントですね。
最近、学校現場で左利きの子どもが増えていると聞いています。「もちかたくん」の左利き用を作ることになったのは、保護者からの意見を多数いただいたことによります。一人でも多くの子どもたちに対応できるようにすることが大切です。

▼最後に一言、メッセージをお願いします。
この器具を使うと文字がきれいに書けるようになるとか、鉛筆を楽に持てるようになるといったことはもちろんですが、みんなと同じ持ち方ができるようになるための「支援をする」というところが、この器具のいいところです。一人でも多くの子どもたちに、鉛筆を正しく持てるようになり、文字を書くことを楽しんでほしいと願っています。



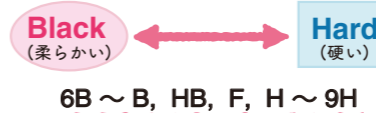
株式会社トンボ鉛筆 広報宣伝室 春原恵子 さん

芯の濃度・硬度とは？

鉛筆の芯の濃さと硬さを表す6Bから9Hまでの記号をいいます。鉛筆の芯は、黒鉛と粘土の割合によって、硬いものから軟らかいものまであり、たとえばHBでは、黒鉛65%に対して、粘土35%です。
日本工業規格(JIS)では、芯の濃度は6Bから9Hまで17種類あり、硬い芯はHardの頭文字Hを使い、軟らかい芯はBlackの頭文字Bで表されます。その中間のFは、Firm(ひきしまった)の頭文字です。

鉛筆の軸の形状(六角軸と丸軸)

鉛筆を持つときは3本の指を使うので、その倍数が正しく握れるとされています。一般的には転がり止めともいわれています。
色鉛筆に丸軸が多いのは、広い面を塗る際に芯の片側だけが減らないよう、軸を回しながら使いやすいということがあります。



鉛筆の筆記距離はどのくらい？

鉛筆1本で書くことができる筆記距離は、約50kmです。他の筆記具と比べて圧倒的な長距離で、経済的です。ただしこの距離は、HBを用いて筆圧を300gに定め、芯を尖らせず、鉛筆1本(172mm)全て筆記するという条件つきなので、あまり現実的ではありません。
参考までに、シャープペンシル用芯(0.5mm)は1ケース40本使って約10km、ボールペン(油性)はインクを全て使って約1.5km以下です。

鉛筆の長さ・太さの決まり

鉛筆の長さは、172mm以上がJIS規格で、トンボ鉛筆では176±0.8mmを基準にしています。これに近い長さを最初に決めた人は、ドイツ人のルター・ファーバーとされ、1840年頃に「7inch(17.78cm)」にしようとして提案しています。この長さは、大人の手のひらの付け根から、中指の先までの長さからとったといわれています。
太さは、JIS規格では最大径8mm以下、トンボ鉛筆の基準では7.7±0.2mmです。

消しゴムの種類

消しゴムは、いわゆる天然ゴムでできているゴム字消しと、プラスチック字消し、合成ゴム字消しの3種類があります。ゴムではないものもあるので、正確には「字消し」といいます。
ゴム字消しは、鉛筆用の白ゴム、ボールペンなどの筆跡を消すための砂ゴムなどがあります。
プラスチック字消しは、プラスチックに油を染み込ませたものが主流ですが、最近は合成ゴム(SBR)字消しも増えています。

消しゴムで文字を消す仕組み

黒鉛の細かい粒が紙の繊維にのったり、からんだりしているのが、「字」や「絵」が紙にかかれた状態です。粒が紙に付着している力よりも強い力で引っぱると、粒はすぐに紙から剥がれます。その強い力というのが消しゴムの表面の力です。したがって、消した後は、消しゴムの表面は吸い取った黒鉛で真っ黒になるのです。そして消しゴムは捨てられ、また新しい表面で違うところを消すことができるのです。



出典：株式会社トンボ鉛筆ホームページ トンボQ&A「文具のまめちしき」より抜粋
http://www.tombow.com/tombow-qa/mamechishiki/

全ての学びにつながる鉛筆の持ち方を『クジャク法』で

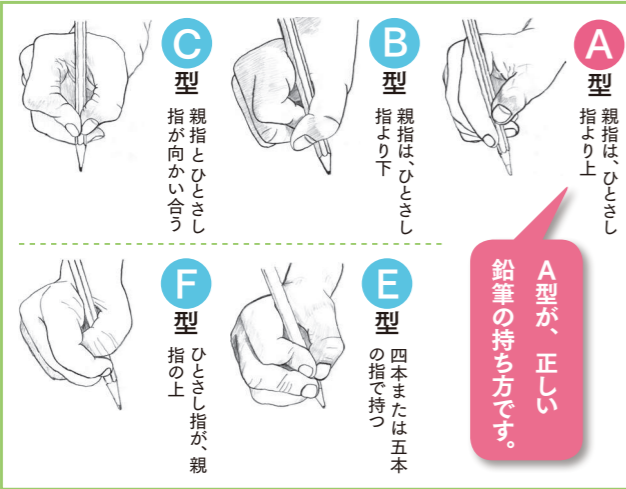
大阪市立弁天小学校 橋爪秀博

小学校に入学した児童が、最初に学習するのが「書く姿勢・鉛筆の持ち方」です。しかし、文字を書く姿勢・鉛筆の持ち方をよく見ると、ほとんどの児童が、ノートに顔を近づけたり、鉛筆の先を横から覗いたり、鉛筆を固く握ったり、鉛筆を四・五本の指で握ったりして書いています。

学習指導要領(国語科)では、第一・二学年で「姿勢や筆記具の持ち方」を指導することになっています。しかし、「子どもも大人も先生も、正しく鉛筆を持っているのは一割程度」という好ましくない状況が長い間続いています。

鉛筆を正しく持つために次のような指導法が効果的です。まず、児童の鉛筆の持ち方をカメラで撮り、自分の持ち方が【児童によく見られる鉛筆の持ち方】で何型かを見分けさせます。児童は、四・五本の指で鉛筆を持つE型が増えてい

児童によく見られる鉛筆の持ち方



A型が、正しい鉛筆の持ち方です。

「物語で覚えるので忘れない」と、好評です！

鉛筆の持ち方 クジャク法

〜くじゃくは毒へびを食べてくれるんだ〜



正しい鉛筆の持ち方ができた！

- *ひとさし指に鉛筆を沿わせる。
- *親指は、ひとさし指より下がらない。
- *親指を少し曲げる。
- *3本の指で持つ。

幼小連携も提案しています。幼稚園児にもわかるように、歌やDVDを作成しました。インターネットで『クジャク法』を検索すると、すぐに見ることが出来ます。正しく鉛筆を持ち、良い姿勢で文字を書く伝統文化を取り戻しませんか。詳しくは書籍にまとめてあります。是非手に取ってご覧ください。

『正しい鉛筆の持ち方ができる クジャク法』
橋爪秀博著
株式会社アットワークス(二〇二一年)





子どもが主体的に課題解決を図っていくことができるよう、指導するうえで大切にしていることをいくつか紹介します。

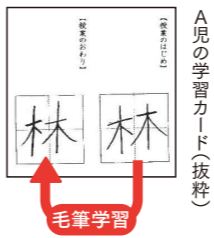
◆硬毛関連指導

毛筆を使用する書写の指導は、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導することから、硬毛関連の指導を心がけています。たとえば、一単位時間（または単元）のはじめと終わりに硬筆を取り入れ、毛筆で学んだことが硬筆にいかせることを実感できるようにします。また、国語の言語活動や学校行事、実生活などと関連させて指導計画を立て、子どもが必要感をもって課題解決を図り、実生活や学習場面にいかせる良さを感じられるようにすることも大切だと考えます。

一単位時間のはじめと終わりに硬筆を取り入れた例(四年 左右の組み立て方「林」)

硬毛関連の意識はもちろんです。学習の見直しや振り返り、課題意識をもたせるために、学習カード(教師が作成)を使用しています。

学習のはじめに、教科書を見ないで書いたA児の「林」は、偏と旁の幅が同じで、左右の譲り合いができていませんでした。毛筆で自分の課題を解決するために練習した結果、学習の終わりには、偏の幅を狭くして、左右の譲り合いに気をつけて書くことができました。



毛筆で学んだことが硬筆にいかされていることを、自分の学習過程を振り返って気づくことが大切だと考えます。また、「林」だけに終始するのではなく、他の文字へ活用できるようにすることが重要です。左右の組み立て方からなる漢字を教科書の巻末や辞典などから探して、左右の組み立て方を確認したり、実際にそれを意識して他の文字を書いたりする場を設けることで、実生活や学習場面に生き生きするようにすることを心がけています。

四十五分で①〜⑩まで終わるのは時間的に厳しいので、二時間続き(九十分)で行うなど、時間を柔軟に扱うようにして、友達との学び合いも大切にします。四十五分で行う場合は、自己修正のみ(⑦)、自己評価のみ(⑨)にするなど、内容に軽重をつけます。

***5自己修正の実際**

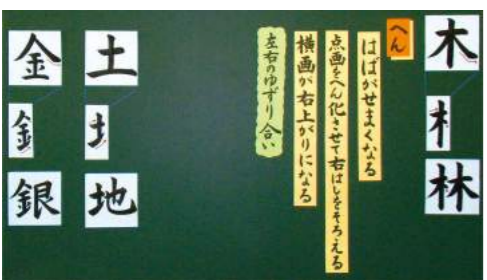
試し書きと題材(教科書の文字)を比較し、基準に照らして自分の課題を見つける活動を大切にしています。ここで大切なことが二つあります。

一つ目は、自分の課題を見つけることです。課題の発見は、これからの子どもたちに必要とされる力ともいえます。自分の現状の文字の課題だからこそ自分ごととなり、主体的に課題解決を図ろうとする姿勢につながると考えます。

二つ目は、基準に照らして自分の課題を見つけることです。基準に関係なくやみくもに課題を見つめる活動となると、本時で身につけたい力が生じます。自分の課題が明確になったら、自分のめあてを立てるようにします。



- ④で確認した基準
- 「木」が「きへん」になると偏の幅が狭くなる。
 - 点画が変化して右端が揃う。
 - 横画が右上がりになる。



B児が自己修正したものの

- あ 隣の幅を大きく(広く)することで偏の幅を狭くする、という意味で「大きく」と記入している。
- あ 線で偏と隣の幅を記入している。
- あ 第一画を短くすることを、「みじかく」と言葉で記入している。
- う 横画を右上がりに書くということとを、矢印(→)で記入している。

現行の学習指導要領が改訂された際、その要点の一つとして「学習の明確化」が挙げられました。自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視し、指導事項については、学習過程を明確化した内容になっています。書写においても、学習過程を明確にし、子どもが主体的に課題解決を図れるようにします。

◆課題解決的な学習過程による学び

書写における一単位時間の展開例・課題解決的な学習過程

①教材の確認	●本時で学習する文字(題材)を知る。
②試し書き	●教科書を見ないで題材を書く(硬筆・毛筆)。
③目標の把握	●本時の全体のめあてを知る。
④基準の確認	●めあてを達成するために必要な要素(基準)を話し合い、確認する。
⑤自己修正	●毛筆の試し書きと教科書の文字を比較し、基準と照らして自分の課題を赤ペンで記入する。
⑥練習	●自分の課題を明確にし、自分のめあてを立てる。
⑦自己・相互批評	●自分の課題を解決するために、課題に応じた練習用紙(かご字・骨書き)などを使って練習する。
⑧まとめ書き	●自分の課題が改善されているか、教科書の文字と比較して課題を再確認する。
⑨自己・相互評価	●自己修正や相互批評で明らかになった課題を意識して、半紙(一枚)には毛筆で、学習カードには硬筆で書く。
⑩硬筆への発展	●試し書きとまとめ書きを比較し、めあてが達成できたか(課題解決が図れたか)を確認する。

●本時の毛筆で学習したことを硬筆にいかす。

***6練習用紙の工夫**

課題別に練習用紙(かご字や骨書きなど)を作成しておき、個々の課題に応じた練習用紙を選んで練習できるようにします。練習用紙で自分の課題解決のコツがつかめてきたら、半紙で練習するようにしています。



***9自己・相互評価の実際**

自分の課題に応じた練習、批評、まとめ書きを終えたら、試し書きとまとめ書きを比較し、自分のめあてが達成できたか(自分の課題が解決できたか)を自己・相互評価します。比較することで、学習の成果(課題解決の度合い)が目に見えてわかり、自分の文字の変容に子どもたちは驚きます。また、課題を解決できた喜びや達成感が、次への学習意欲にもつながります。

試し書きとまとめ書きを比較し、学習の成果を確認するB児



子どもの主体的な学びや課題解決を図ろうとする姿勢、つばやき、発言などを取り上げ、課題解決的な学習過程での学びを価値づけます。



B児の試し書き(左)とまとめ書き(右)

自分の課題を意識しながら主体的に練習した結果、課題解決を図ることができた例です。試し書きとまとめ書きの比較によって、学習過程を振り返り、身についた力を子ども自身が自覚し、その力をいかそうとする子どもの育成を目指します。



配列は、新聞やポスターなどの掲示物を作る際に大切です。中学年では、行の中心を揃えること、字間・行間を均等にするを中心に学びました。高学年では、それに加えて「用紙全体に対する文字の位置や余白を考えながら書く」ことが重要になります。「夕やけ雲」は、文字の大きさと配列を考えながら書くのに適した題材です。中学年で、文字の大きさの関係（仮名は漢字よりやや小さく書く）について学んでいるので、六年では、漢字と仮名の大きさだけでなく、余白を意識して書くことを目標としました。

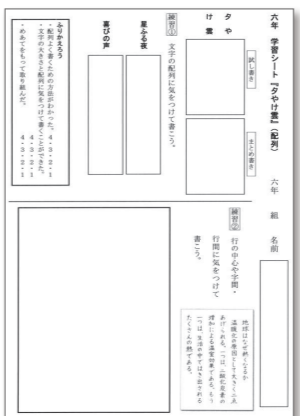
① 書写学習の流れ（硬筆・毛筆の関連）に沿って

① 題材を知る

本時の題材が「夕やけ雲」であることを知らせました。

② 硬筆で試し書きをする【学習シート】

学習シートに、硬筆で試し書きをしました。
※普段、児童は鉛筆を使います。毛筆での試し書き、まとめ書きだけでなく、まず鉛筆で試し書きを行い、最後にも鉛筆でのまとめ書きをさせます。



⑤ 課題解決の方法を話し合う

文字カードと手本を見比べ、どうすれば良くなるかをグループで話し合いました。その後、良くするためのポイントを発表し、交流しました。



漢字が小さい



中心がずれている



平仮名が大きい

※外形枠を作成し、手本の平仮名「や」と漢字「雲」を重ねました。文字の大きさの違いを視覚的にわかりやすくしました。
※外形枠を重ねると「雲」がはみ出るため、「や」よりも大きく書かなければならないことが理解できたようでした。



② 指導を終えて

字形については、「雲」の雨かんむりの第三画を「雨」のように書いてしまっている児童が一部見られました。

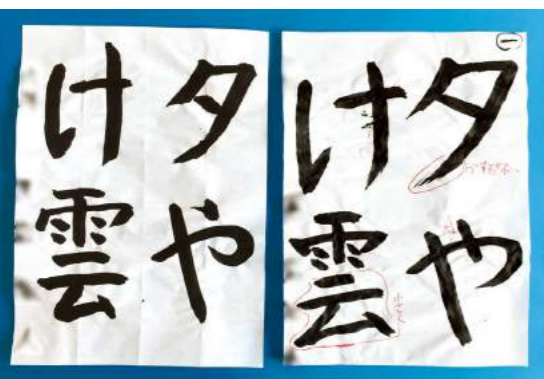
文字の大きさについては、各文字の外形を枠で囲んで比べ、視覚的に捉えやすくすることで、大きさの違いを意識して書けるようになりました。平仮名「や」「け」と漢字「雲」を比べることで、平仮名は漢字よりもやや小さく書くことに気付いていました。
また、漢字「夕」と平仮名「け」の大きさにあまり差がない理由を問いかけてみると、児童から「夕」は画数が少ないからではないか」という意見が出ました。漢字だから大きく書くというだけでなく、画数によって文字の大きさが変わるということも理解しているようでした。

③ 書写嫌いの児童を減らすために

私は、本学級を五年生から担任しています。書写について聞いてみたところ、五年生の頃は、「字が下手だから」「準備が面倒だから」という理由で「嫌い・どちらかというと嫌い」と答える児童が九割以上でした。六年生になってから同様のことを聞くと、「嫌い・どちらかというと嫌い」と答えた児童は六割程度でした。答えが変化した児童にその理由を聞いてみると、「授業の終わりに前に貼ってもらい、友達が褒めてくれて嬉しかった」と「試し書きとまとめ書きを比べると、上手くなっているから嬉しい」とのことでした。

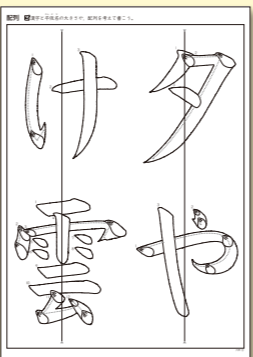
試し書きとまとめ書きを二枚並べて掲示することで、他の児童との比較ではなく、一人一人の努力を評価することができました。この方法は、大阪市の初任者研修でも紹介されています。課題を解決する方法をグループで話し合い、それを受けて自分の課題に向かって練習し、成果を互いに認め合うことは、アクティブ・ラーニングにつながると考えます。

以前、本誌で取り上げていた低学年の毛筆指導で水書用紙を用いる事例も、書写嫌いの児童を減らすためには興味深い実践であると考えます。今後も「書写が大好き」と児童が思える授業作りを目指していきたいです。



⑥ 毛筆で練習する【練習シート】

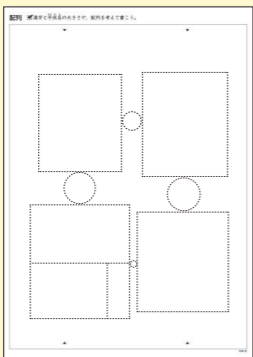
※かご字の練習シート



※指でなぞってから毛筆で書くことで、注意深く練習していました。



※外形枠の練習シート
(文字の大きさ、字間、余白)



※文字の外形を囲み、文字と文字の間に円を書くことで、文字の大きさを意識して書くことができました。外形枠を意識したことで文字が小さくなってしまいう児童には、文字が外形枠から少しはみ出ても良いことを助言します。

⑦ 相互評価をする(本時の課題を中心に)

※さらに配列よく書くにはどうすれば良いかを、友達同士でアドバイスし合います。

⑧ 毛筆でまとめ書きをする

毛筆の試し書きとまとめ書きを比べ、学習の成果を確かめました。

⑨ 学習の成果を全体で交流する

硬筆の試し書きとまとめ書きを比べ、学習の成果を確かめました。

⑩ 硬筆でまとめ書きをする【学習シート】

※学習シートを見ることで、一人一人の成長度や理解度を確認でき、評価にも役立ちました。

⑪ 硬筆で発展練習

※硬筆での発展練習を行い、日常生活にいかせるようにします。

⑫ 日常生活や学習活動にいかす

アクティブ・ラーニングを視点とした書写指導の改善についての二回目だ。今回は、授業過程における書写指導改善の可能性を考えてみたい。

従来から各地の校内研修会（国語科学研究授業）にお招きをいただくのだが、最近子ども主体の授業改善が図られていて喜ばしい限りだ。ところが、各学校に共通して課題となっていることに気付かされる。それは時間の問題である。子どもの学習活動が多く取り入れてあり、その時間設定がうまくいかず授業時間が足りなくなることが多いのだ。

例えば、パーソナルワークを五分と想定していても実際には十分かかってしまったり、それを承けたグループワークにおいても想定を大きく越えてしまったりしている。その要因には課題設定のミスマッチもあるのだが、それ以上に学習活動を支える言葉の力の不足が感じられる。パーソナルワークで自分の考えをワークや付箋に書き込んだり、ノートに書いたりするのだが、時間が不足する。グループワークでは協議や討論が司会のもとに行われ、次のクラスワークに繋いでゆく。それを支えているのがグループの役割分担に従って内容をまとめる記録係だ。話の内容を素早くメモすると同時に、整理や分類のためにみんなが読んで考える「ボード」にまとめる。

それがスムーズに行かない。要約したり、簡条書きしたりの「書く能力」が不足している。さらに、それをスムーズに書字する力が足りない。素早くワークシートの該当する欄に適切な大きさで読みやすく書けない。ボードには、サインペンで書くのに不慣れなのか、大きさのまちまちな文字がこちらこちらの方向に書き綴られている。もちろん、誤字や脱字、表記法の間違ひもある。

書字能力については、一定の時間に書ける文字数の調査が行われていて、高学年で一分間に五十字が標準のようだ。しかし、実態を見るかぎり個人差が大きく、標準というには憚られる。

これまでの教師主導の授業では、書く活動は板書をそのまま写す場合がほとんどで時間配分も比較的スムーズだった。文字は丁寧にゆっくり書けばそれほど問題ない。一定の時間に書ける文字数の調査が行われていて、高学年で一分間に五十字が標準のようだ。しかし、実態を見るかぎり個人差が大きく、標準というには憚られる。

これらは、お気付きのように、各教科に共通する汎用的な力である。算数の授業で具体的に考えてみたい。三年生の「あまりのあるわり算」で文章問題の答えとそれを説明する理由記述をA3サイズのホワイトボードに書く場面である。答えを言葉で、理由を図と言葉で記述する課題だ。用材に対する文字の大きさが不揃いであったり、行の中心、配列、字間や行間、余白などが不十分であったり、個人差がある。

国語科では、付箋やカード、メモ用紙、ノート、ワークシート、ホワイトボード、黒板などに、鉛筆やフェルトペン、マーカー、サインペン、チョークなどと様々な用材に様々な筆記具で書く。算数における問題点と共通するものがあるが、冒頭で触れた一定の時間で書く個人差が授業構成上も問題だ。これらの各教科に共通した課題があるのに、教科内容が優先されるために問題とされないで来た。ここにこそ、国語科書写の大きな役割がある。それを子どもたちの気付きとして組織化するのが大切だ。自分たちの日常にある問題を顕在化させて課題にする力こそ身に付けなければならない能力だ。

書写において得た知識（原理や原則など）が生きていけば当然問題は発見され、それを克服するために知識は活かされるはずだ。知っているだけでなく、活用されてこそその知識だ。

漢字使用においても、似たことが指摘をされてきた。テストではよく書けているのに、実際の体験報告文などの作文や日常の学習場面では漢字が使用されていない。そこには、漢字で表記することの意味や効果が子ども自らによって検討されてこなかった実態がある。

そのようなメタ認知を働かせて、自分たちの活動を変革するための時間を授業過程の中に組み入れることが最も求められている。

では、どうすれば良いのか。言語活動で相手や目的意識を明確に持つて書く場面では、途中の交流で書写の観点を入れた振り返りや相互評価を行うことが必要になる。ところが、日常的な学習場面では一々そのようなことはできない。そこで書写の時間に各教科における学習活動の書く場面の課題を子どもたち一人一人に振り返らせ、それを交流する。それをまとめて「クラスの課題」と「自分の課題」の二つを作り、解決方法や計画を協議する。

例えば、各教科で思考操作のために活用されているPMIチャートを取り上げると、簡条書きの方法や文字の大きさ・行の中心・行間などと、制限時

れて良かった。しかし、子ども主体で自ら課題を解決しようとすれば、言語操作や思考操作を重ねたうえで一定の時間に決められた文字数で記述することが求められる。そんな中では、個人差が大きのままに放置できない。国語科の支えが書写に求められる。

日常の学習活動において、書写が果たすべき支えには、学校現場の現状から次のような場面が考えられる。

- ① ノートに学習内容の記録とともに自分の考えを記述する。
- ② 話し合いの記録（協議と討論に応じて）分類・整理・まとめなど。
- ③ 交流のために大きなボードに書く。
- ④ 自分（グループなど）の考えの表明、説明のために小さなボードや短冊などに書く（図示・KW・簡条書き・文章など）。
- ⑤ インタビューなどで聞き取ったり、相互評価したりするためのメモなど。
- ⑥ ワークシートなどの指示や書式に応じて書く。



大きなボードに



小さなボードに



短冊に

間内に書けるのかといったことが課題として出てくる。特に速書きのために正しさや整いも大切であるが、許容される範囲でどの程度書けるかが協議される。その中で「クラスの課題」となったものは、書写の時間に取り上げて共通に学び合うことになる。この「振り返りと課題解決の見直し」に基づいて各教科の学習活動を行い、計画した一定の期間が過ぎれば、また振り返りと交流を行い、螺旋的に高めるようにする。

協議することで課題に即した書写の指導事項を学ぶことになり、さらには子どもたちの新たな発見も引き出せる。例えば、個人がパーソナルワークで考えていたことがグループワークで高まったり、改まったりするので、それを報告するには赤のマーカーで線を入れて変化した内容をこれも赤のマーカーで書き入れると良い。そのため、行間は空けるのが良いといったようなことだ。

今回は、授業過程における子ども主体を目指した書写指導改善を提案させていただいた。



PMIチャートで説明する学生



交流後に見え消しの方法で自分の考えの変容の説明準備を行う学生



おさきやすじ
尾崎靖二

プール学院大学教授。教育委員会指導主事、四條畷市・交野市の小学校長、交野市教育センター、中央教育審議会教科別専門部会（国語）委員、学習指導要領解説国語編作成協力者などを歴任。日本文教出版「小学書写」教科書編委員。